

△ピサラ＝ヒララ△

「平良」の形成は港から

〳官庁街・三通り・市場・料亭街……〳

仲宗根 將二

はじめに

まちの成り立ちにはそれぞれ大切な要因があるようだ。広く知られているのが城下まち。神社・仏閣に拠るのが門前まち。藤村らの作品に頻出するのが宿場まち。もともとこの方は旅人相手に発生したのであるから、全国至る所の街道筋に所在していよう。同様に、島々の外界との接触は船泊りから始まったであろうから、港まちとして発生し、次第に特色ある地域を形成していったことであろう。

平良の市街地も古琉球から漲水泊（現平良港）に始まって、人の往来が増えるにもなつて、とりわけ近代以降、官庁街、商店街、市場、料亭街等が形成され、現在の形態へと発展してきている。当然のことながら大戦後の一九五〇年代に入つて、民間航空路が発達する以前の宮古は、「ヒト」も「モノ」もすべて唯一平良港からの往来であった。

一九七五（昭和五〇）年四月、宮古郷土史研究会の設立に参画し、監事役はじめ、終生運営委員をつとめられた故羽地栄さん（一九一三～二〇〇〇）は、平良港に面した「イリ里」

について、生まれ育つた土地柄のせいもあつたらうか、事あるごとに愛惜の思いを込めて、「イリ里は宮古の玄関口」と言つておられた。それは転じて「宮古の文化の発祥地はイリ里」という持論をなしておられたのである。

○宮古発祥の聖地

八世紀初頭、大和朝廷の「古事記」等の記述と同根とみなされる「宮古旧記類」や伝承等によれば、宮古に初めて天降つた地は漲水御嶽の地とみなされている。それゆえ後世そこを聖地として御嶽を仕立てたのであろう。琉球王府公認十六嶽の筆頭に位置づけられ、古くから宮古中の人びとの最高の崇敬の地である。

宮古の与那覇勢頭豊見親が沖繩本島の王権と初めて公的接触をしたのは、一三九〇（洪武二三）年と伝えられている。船出は白川浜からである。十四世紀半ばごろ宮古中を席卷した与那覇原軍団が目黒盛との決戦に敗れて落ちのびた先のひとつが白川浜の東方、与那浜一带と伝えられている。与那覇勢頭は、大国の影響下で一族の再起をはかろうと船出したのだと伝えられている。

その後の一族の本拠地は与那浜や白川浜ではなく、平良の漲水周辺である。与那覇勢頭の子・泰川大殿が「伯牛の病」を得て隠棲した地は、パイナガマとトゥリバーのほぼ中間に位置するピキヤズ附近であり、その子・大立大殿が「白繩の

慰（漁）を催した海辺として知られ、またその館跡と伝えられる地域は、現行市場通りの西方北西里、俗称「イリ里」の広大な地域である。南縁は下里・西里両村（字）の境界線に当たる道路に沿い、敷地との間は、近年まで無蓋の大きな溝で仕切られ、大立屋敷の「ウブンズ（大溝）」と称されていた。その西方に延びる道路は海に面して広々とした野原の「ヌヌド」に向かい、岬状であった先端に、大殿の墳墓（ミヤールカ）もある。東方に延びる道路は平一小に向かう「ガイセン通り」である。ミヤールカはその後の道路整備等で外郭を失いかなり縮小しているが現存し、市の文化財に指定されている。

○官庁街形成の背景

與那覇勢頭の子や孫が漲水の地に本拠地を構えたのは、ここが宮古最高の聖地であるばかりでなく、良き泊（港）を控えていたからであろう。のちに大立大殿に養育され、その後を継いだ仲宗根豊見親が泊に面して、漲水御嶽に向き合うように古琉球から近代初期にかけて宮古統治の拠点となった総合庁舎とも称すべき「蔵元」を開設したのもそこに起因しているよう。

現行北小学校から西方へ、次の十字路に至る一帯は近世琉球にあって、南・北両学校所、医者仮屋、在番仮屋三棟（東・中・西）が軒をつらね、さらに貢布座、観音堂、祥雲寺、権現堂が配され、蔵元とともに近世琉球における宮古統治の要

衝の地を形成していた。仮屋とは薩摩の方言で、本城に対する出先機関の意である。それらの向かいに位置する現行市役所をはさんで南側は、大立大殿の後裔の屋敷跡（大根間ウウプニーマ）である。

現行駐車場のほど中央に石垣囲いがあり、福木の太木が一本そびえている。一見御嶽のたたずまいだが、大根間の「トウクル」（所川屋敷神）と伝えられている。

一八七九（明治十二年）、廃藩置県後、この一帯に国・県の出先機関が集中し、平良村（町・市）役場（所）等が開設されたのは必然の展開であつたらう。

○「ピサラ」を中心に

1. 官庁街の形成

宮古での県政は一八七九（明治十二年）、在番仮屋に設置された警視派出所から始まっている。翌八〇年、蔵元に宮古島役所が開設され、九三年、警視派出所跡に移って、一九〇二年新築し、島庁、支庁と変遷している。小学校、警察署、裁判所、税務署、郵便局、村役場、図書館……等が並び、官庁街を形成していった。

平良港（現第二埠頭）から戦後開通したマクラム通りの坂を上りきって最初の十字路から官庁街は始まる。その景観からはあるいは官庁通りといったほうが適切であろうか。廃藩

置県から昭和初期までに、左側は三棟の在番仮屋跡等に代つて、平良村（町）役場、宮古支庁長官舎、宮古支庁、宮古図書館、小学校（男子）、登記所、裁判所、刑務所、警察署長官舎、とつづいている。右側は郵便局、警察署、幼稚園、小学校（女子）、税務署、一四七銀行宮古代理店とつづく。

戦後は、左側の町役場跡に電報電話局、支庁長官舎の一角に婦連会館。右側の小学校（女子）跡に保育所と消防署、オグデン会館、市役所。税務署跡に琉米文化会館↓文化センター↓市立図書館、銀行代理店跡に労働金庫支店へと変わっている。

明治六年施行の徴兵令は沖縄県には同三二年から適用されている。翌三二年以降は宮古・八重山は現地検査となり、宮古は平良小学校で実施されている。戦前期宮古には講堂や体育館のような大きな集会場はなく、全宮古的な催しものはすべて平良小学校（庭）か、測候所下の馬場（現市営馬場団地）で催されている。

同様に、全宮古を網羅して開催される大綱引き等も島庁（支庁）前道路で催されている。このように官庁街は古琉球以来、近年まで平良の中心であり、宮古の中核的役割を果たしていたといっても過言ではない。道路網も港を基点に、城辺、下地、狩俣、久松等へすべて放射状に発達してきた。

2. 市場の形成

市場は、親越の坂（「博愛記念碑」の前）を上がりきった広場から西側一帯で開かれていたが、明治末期、旧下里村番所跡に移っている。下里公設市場の前身である。大正期には、旧西里村番所跡に西里通りに沿って中央市場が開設されている。

開始時期は定かではないが、稲村賢敷（一八九四〜一九七八）は「明治四十年頃まで親越に一寸した小屋がけをして肉類や鮮魚類を売っていた」「沖縄の寄留商人等が壺類や金物類、小間物類を此処で売り出したものであろうか」と記している（『宮古島庶民史』初版一九五七年）。親越坂の西側は「クヤモー」であり、その上部一帯が親越の市場ということならば、クヤモーの小料理家並と市場は関連しての出発であろうか。下里村番所跡に移った時期について、一九一〇（明治四三）年十月三日付「沖縄毎日新聞」は、九月二〇日下里事務所に移転し、盛大な移転式典を挙行了たと伝えている。それによると市場はかなり早くから手狭とみなされていたのであろうか、「数十年来」の懸案事項であったかのように伝えている（『平良市史』第10巻、戦前新聞集成上、二〇〇三年）。

羽地栄さんは「西里の民俗」（二〇〇〇年）で、下里市場への移転は、「ご自分の「十歳のころ」（大正十一、二年ころ）」と記している。明治四三年移転後も一部残っていて、このこ

ろすべて移転したということであろうか。

同年十一月七日付前掲紙は、「兼て申請せし西里市場は元西里事務所跡地に経営する事と相成り候」と報じており、こちらのほうも早くから開設が計画されていたことをうかがわせているが、いつ開設したのかはつきりしない。その後、一九一八（大正七）年五月五日付「先島新聞」宮古附録号が「西里の市場」で「長嶺一派」が「公楽座」と銘打って芝居興行を始めたことを報じており、少なくともこの時期までには西里村番所跡に中央市場が開設されているらしいことを示している（「平良市史」第10巻、戦前新聞集成下、二〇〇五年）。中央市場跡は戦後、真栄城徳松氏らによって映画常設館「平和館」が開設されている。

3. 三通りの形成

一八〇二（明治三五）年、人頭税廃止後、増え始めた那覇や県外からの寄留商人によって、「クヤモー」二帯から、市場、西里、下里三通りを中心に商店街が建ち並び、近代宮古の経済を担うようになった。（資料1）

大正期以降、近年にかけて港周辺は再三にわたって大規模な埋め立て工事が進められ、景観は大きく変貌しているが、それ以前の呼称「クヤモー」「クヤー」は、イリ里では今も生

きた地名のようである。近世琉球以来、近代初期まで港周辺で小屋掛けして、船乗りや旅人ら相手の小料理屋が立ち並んでいたことに由来する呼称である。行政上は漲水自治会と称されている地域である。

クヤーとは小屋、モーは野原の意であり、本格的な建物ではなく一時的な簡単な造りの家屋が目立つほどの複数軒立ち並んでいたであろう。近代に入って人の往来が増加し、商う人も増えてくるにともなうて周辺は手狭となり、広い土地を求めて官庁街近くに移っていったあとも、地名は以前のまま残ったようである。

一九〇八（明治四一）年時点で早くも宮古へ寄留する人は、県外から二五戸、七二人、首里・那覇から一一六戸、三六〇余人にのぼっていると、「琉球新報」同年六月九日付けは報じている（前掲「平良市史」第一〇巻、上）。その多くは商人層とみられ、港周辺から始まって、次第に坂を越えて官庁街近くに進出し、市場通り、西里通り、下里通りの商店街を形成していつている。羽地栄さんが作成した「大正年間の平良の商店街」によれば、県外からは西里通りを中心に十二軒、市場通り三軒、首里・那覇からは西里通り十六軒、市場通り十八軒が数えられる。宮古関係らしいのは一軒だけである。

二〇一四（平成二六）年三月、西里通り活性化のための一助として、花ギヤラリーで催された意見交換会で仲本正雄先輩（一九二四〜）やレストランのむらの野村安潤氏（一九四

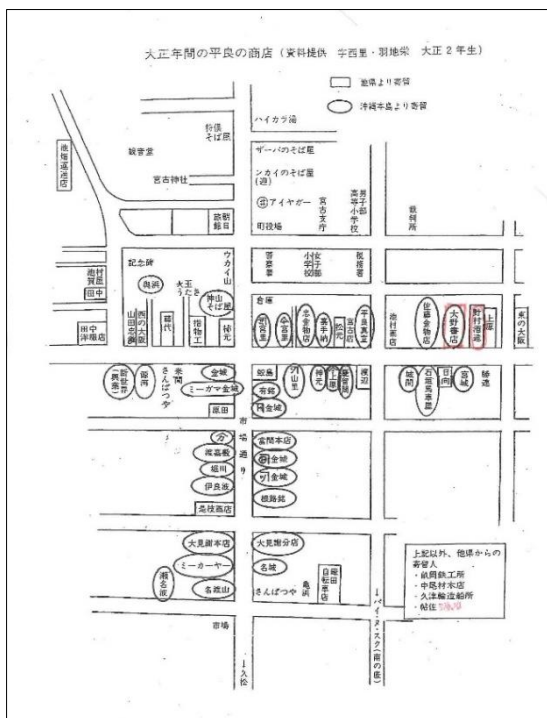
○)らが紹介し、後日頂いた資料では昭和戦前期の西里通りには多少の敷え違いもあるが、一応首里・那覇からとみなされる商店は二〇軒、県外からとみなされるのが十五軒数えられる。その間に宮古らしいのが何軒かうかがえる。東端の「東の大阪」は松下嘉一郎氏、西端の「西の大阪」は山田忠策氏で、共に和歌山県出身のようだが、なぜか当時は「—の大阪」と称して親しまれていたようだ。

先の大戦では宮古からおよそ一万人といわれるほどの人が台湾や県外へ疎開したが、敗戦のせいであろうか、そのうち県外疎開組の大方が残務整理をしたでいどで故郷へ引き揚げてしまったようである。戦前からの県外からの移住者で疎開後も宮古に戻り、永住の地と定めておられるのは管見の限りでは、折田、中尾両家のみではなからうか。気象台長の折田栄徳、労基署長の折田米造、旧平良市役所の同僚・折田時男、「サンエー」創業者の折田喜作氏らは、鹿児島県出身の折田太郎左衛門からの三代め。宮古商工会議所の会頭を長くつとめ、経済界に足跡を残す中尾栄禎、富山裕策兄弟は、和歌山県出身の中尾平太郎にはじまる三代めである。

戦前宮古の二大百貨店といわれた「山田」(山田忠策)、「山小」のうち、山小は明治初期、那覇垣花から移住した宮里良一に始まって、三郎—良栄、ついで先年他界された康弘氏とつづく。戦前・戦後を通じ商工会(—商工会議所)等の設立はじめ、宮古経済界に残した同家の足跡は特筆されよう。

十代から山小百貨店につとめ、戦後は映画常設館・宮古沖映館やキャバレー・メトロの支配人、のち呉服「まる紅」や南西建設を立ち上げ、九〇余歳の現在もかくしゃくとして活動しておられる仲本正雄先輩の出自は那覇・久米町と聞く。宮古へ来て何代めであろうか。県立図書館宮古分館長をつとめた砂川幸夫氏や碇^{きたた}打ちで著名な砂川猛氏ら若い友人らによれば、先輩はすべてにおいて宮古人そのものだという。ともあれ「三代めからは江戸ッ子」という通説にしたがえば、折田さん、中尾さん、宮里さん、仲本先輩らは、もはや宮古人そのものだといえよう。

〔資料1〕



大正期から昭和初期にかけて、宮古の三大特産品として県内外に広く知られているのは宮古上布、黒砂糖、カツオ節である。これらはすべて生産者の筆舌に尽くし難い大変な苦勞の上に築かれた特産品である。宮古上布並びに黒砂糖は明治三五年の人頭税廃止以後、カツオ節は明治四〇年代に入って流通機構ののってきたものである。当然のことながら流通の大方は商人の手にゆだねられている。

それゆえ残念ながらすべては順風満帆であったとは言えないようだ。生産者と取引業者との間で、仕込み資金や取引き価格等をめぐって様々な軋轢があったことも伝えられている。近代宮古の経済を整理するに当たっては、その辺りについても十分に配慮する必要があるだろう。

なお西里通りには東西二か所に消火用地下水タンクが造設されて火事に備えていた。東は赤嶺四辻の西寄り、西は山小百貨店前、一基四五〇石(約八万二〇〇〇リットル)の容積。

4. 料亭街の形成

港周辺(クヤモ)で主として船乗りや旅人相手に始まったとされる小料理屋が、人の往來の増加にともなうて手狭となり、大正期に入って広い土地を求めて「イリ里」に移り、俗称「サカナヤ」街を形成していった。(資料2)

稲村賢敷先生(一八九四〜一九七八)は「料理屋の起源に



〔資料2〕イリ里の地図(ゼンリン住宅地図)平良市

ついで、「宮古島在番記」の記述や古老の言い伝えとして「旧藩時代に山原船乗りを相手として小屋毛（親越坂道の西方一帯にあった寄留人部落）に料亭があった」と紹介し、さらに次のように記している。

次いで明治二十年頃福原御嶽附近（現在は共栄無尽の南通を西に行った巷の角を北に入った所）に一寸した飲み屋が出来て酌婦をおいて料理屋をしたのが紅灯街の始めであろうか、其後尻間坂道の南側（現在のはいから湯屋の道を隔てた南）にも料亭が出来るようになり、次第に祥雲寺の北部一帯、いちゆたー屋附近に四、五軒料亭が出来るようになり大正八、九年頃迄はつづいたようである。現在西里西部にある料亭街は大正八年頃、月見亭ができた頃から暫くの間はこの附近一帯料理屋と化したように思う、大正十年頃にはもう北部のいちゆたー屋料理屋街は閉鎖していた（稲村賢敷『宮古島庶民史』一九五七年）。

羽地栄さんは、明治二七（一八九四）年生まれの高吉トシ（通称万力ヤマ）の八二歳の時の聞き取りを記録しているが、トシさんの話なのか、羽地さんご自身なのか判別しにくい所があるが、ここではトシさんの話として紹介しておきたい。年令からみて一九七五年ごろの聞き取りであろう。

昔は、仲宗根豊見親の生誕地、仲屋周辺が都会地であつ

た。「ソバ屋」「マツチャ」「サカナヤ」もこの界隈に集中した。お寺もあり、観音堂、権現堂の文化施設もそなわり、繁華街の様相を呈し、遊び人が集中した。現代になって、寺のクス（北隣り）私の友人の父、池間先生が教育上、風紀取締上、サカナヤーズウリがうるうるまわるのは、子供なんかの教育上よろしくないと排斥運動を起こし遂にサカナヤーは前の毛から追放された。それから次第に南へ南へと移動、移転するという運命をたどることになった。

大正四、五年ごろ当時のサカナヤーは殆ど沖繩（＝本島）の人で、宮古の人は亀浜のサカナヤーがあるだけだった。（中略）当時のサカナヤーは今のまいなみ荘のところの前に並力ニの父の前波のサカナヤーがあり、その西隣りに堀川のサカナヤー、元きくや食堂にンナバのサカナヤーであった。（中略）寺の北隣りに一番最後まで残ったのが「イチユターヤー」。明治三十年頃できたのが、小屋毛の栗国のサカナヤー、沖繩の人。「高ヤー」の原野の中に「亀浜ンマのサカナヤー」がたった一軒イリ里にあった（羽地栄『西里の^{いりざと}民俗』二〇〇〇年）。

ここでいう池間先生とは、この時期、今の市役所の地にあつた平良女子尋常高等小学校（平女校）の校長で、のち第二代平良町長となる池間昌喜（一八七五～一九三七）で、住ま

いは道をへだてて祥雲寺の北側に隣り合っている。宮古高校長から旧平良市の教育長をつとめた故池間昌彦の祖父。男女二つの小学校が近くにあり、文教地域としての整備を構想しての料亭移転の提唱であったようだ。

イリ里で生まれ、イリ里で育った仲宗根栄吉さん（一九〇二〜八一）は、イリ里のサカナヤ、料亭について次のように語っている。

昔はイリ里にはサカナヤはなかった。私の子どものじぶんにはもつと港近く、クヤー附近に三〜四軒あった。今の古堅鍛冶屋（西里十三）のあたりがそのころの海岸になるが、その付近に福地というサカナヤがあったし、栗国さんのとなりにも一軒あった。市民会館の近くにイチユターヤ、亀川、松原というサカナヤがあった。イチユターヤとは屋号で、苗字は長浜と言っていた。宮古で初めてサカナヤはこのイチユターヤである。

イリ里のサカナヤの出初めは、確か喜久屋食堂のあったあたりに出来た平家の松島亭で、瀬名波という人がはじめた。大正五、六年ごろであったと思う。始めはみな茅葺きの民家で、そのうち次々と瓦葺きにかわり、さらに昭和に入ると二階建てに変わっていった。（中略）

戦前サカナヤがもつとも多い時には二十一軒になっていた。二十一番目にできたというので、「料亭二十一番」という屋号がついたほどである。昭和何年であったか、は

つきりしない。アンマーは大抵那覇の辻の出身で、（沖縄の）方言ばかり使っていた。そのころのサカナヤでは沖縄本島の民謡をうたうのがふつうで、宮古の歌をうたうというようなことはなかった。たゞ一軒、タカヤ附近の亀浜というサカナヤで宮古アヤグをうたうことがあった（『地域と文化』三号、一九八〇年）。

料亭の経営者はともかく、実務を取り仕切る「アンマー」や酌婦たちの大方は沖縄本島か八重山出身者で、宮古出身者は皆無であった。仲宗根栄吉さんの記録にもあるように、日常交わされる言葉も沖縄本島の言葉が一般的で、歌や踊りもみなそうであったようだ。稀に、「工工四」もない宮古民謡を所望するものは田舎者扱いで、相手にされなかったと伝えられている。

料亭酔月の娘で、県立一高女を卒えて、鹿児島県立一高女の専攻科を卒え、創立当初の宮古高等女学校で教鞭を取った平良利子さん（旧姓上原・一九一六〜二〇〇九）は次のように記している。

大正の末頃、島には十数軒の料亭があったと思うが、島の料亭の酌婦達は、ほとんど那覇辻町の遊郭か八重山から来た女達で、島出身の女は一人もいなかったようである。

島の人達は、料亭の女達が辻遊郭から来たかどうかにかかわらず一般的に彼女らのことを「ズリガマ」（尾類小女郎）

と卑みをこめて呼び、蔑む目で眺めていた。だから島の女達は、「ズリ」になることを非常に恥じていたように思われる。

辻から鞍替えして宮古島のような離島へ落ちのびて来るのには、みなそれなりの理由があつたのだ。親の頼みに逆らえず、前借にまたも借金を積み重ねて来ることがあつたり、また自分自身の成行きで、借金を余計にしなくてはならない破目になつて渡つて来たりする。しかし、鞍替えする度に、中入り（口入れ屋）の手間賃だ、何だと、借金は脹らむのである（平良利子『酔っぱらつたお月さん』一九八二年）。

現在のような公民館や公会堂のような集会場のない当時、料亭は単に酒食を提供する遊興の場であつたばかりではない。各種歓迎会や披露宴、会議、忘年会等様々な催しものに活用されている。しかし残念ながら戦前期の料亭の全体像を知る名簿のようなものは見当たらない。せいぜい当時の新聞等の記事や広告等で断片的に確認するていどである。それでも古くは一九〇〇（明治三十三）年以降、一九四〇（昭和十五年迄）、もつとも多いときで二〇余軒確認できる。次のとおりである。

一九〇〇（明治三十三）・九・五「琉球新報」五軒
一九一〇（明治四十三）・六・二〇「沖繩毎日」一〇軒

亀浜、望海亭、伊計、福地、松山、松原、染屋小、大城、栗国、無名楼

一九一一（明治四十四）・六・三〇「琉球新報」十三軒、
亀浜亭、知念亭、下栗国

一九一三（大正二）七・十六「琉球新報」染屋小、望海亭。七・十八、マンクラーヤ。七・十六、大城亭、小橋川亭

一九一七（大正六）「琉球新報」創刊二十五周年祝賀広告、十一軒、大正亭、三好亭、二葉亭、吾妻亭、宮古亭、望月亭、都亭、月見亭、盛客楼、酔月亭、三昌亭

一九一八（大正七）・二・十五「先島新聞」宮古附録号、
風月亭、花月亭、朝日亭、真砂亭、浪花亭。二・二五、
大城亭、望月亭、酔月亭、大正亭、イチユター屋、都亭、
三好亭、望海亭、風月亭、吾妻亭、月見亭、浦崎亭、宮古亭、瀬名波亭。五・十五、吾妻亭、酔月亭、宮古亭、
十八番、望月亭、二葉亭、大城亭。五・二五、浪花亭、
望月亭、月見亭、三好亭、十八番、大正亭

一九一九（大正八）・一・十五「先島新聞」宮古附録号
官民合同忘年会 善かれ悪かれ小馬の如き七年度午年の
荒春風世界に漲り其の忘年会は官民合同師走の三十日望
海亭に於て村長発起となり、開会せり。参する者七十名
余五に意気徹し熱情溢れて愉快に年を忘る。去れど世界
大戦の大記録如何して忘れんぞやだ。

一九二二(大正十一)八・五、宮古郡荷主協会、望海亭で創立総会、一九三三(昭和八)・四・五、宮古商工会と改称する(「宮古商工会二十年史」)

一九三一(昭和六)・一・一「宮古時事新報」年賀広告
昭和亭、酔月亭、日勝亭、十八番、吾妻亭、月見亭、いろは亭、明月亭、大正亭

一九三二(昭和七)・十・六、「宮古民友新聞」昭和亭、吾妻亭、料亭十八番、酔月亭、月見亭、大正亭、いろは亭

一九三六(昭和十一)・十一・十四「みやこ時報」月見亭、二十一番、酔月、銀水、菊水、吉野家、みはらし、大正亭、いろは亭、一富士、一心亭、明月。十一・十四

「宮古民友新聞」十八番本店。十一・二六「海南時報」料亭銀水、料亭十八番支店、料亭月見、料亭八千代
一九四〇(昭和十五)・五・三〇「琉球新報」料理屋二

○軒

連日の米・英軍の猛爆撃で平良の市街地はじめ集落の大方は焦土と化し、戦後、宮古の復興は「ゼロからの出発」と言われている。米軍の全面占領下、人びとは国・県に関係なく、衣・食・住にも事欠くなか、必死になって復興に取り組んでいる。宮古支庁や町村当局は戦中に引きつづいて何とか一定の機能を維持し、十二月一日十か月振りに新聞も再開さ

せ、市街地の電気、電話も回復させている。宮古島郵便局が一九四七年度版としてガリ版刷りはがき大の十二頁のみ残る「電話番号帳」は、「官公庁」や「学校」等と同様に、「料理屋飲食店の部」として十六軒、明記されている。次のとおりである。

- 二一 二十一番 (佐和田玄亮)
- 三〇 十八番支店
- 四三 大正亭 (砂川玄徳)
- 四五 丸屋 (羽地義雄)
- 四七 酔月 (和田藤太郎)
- 四八 春の家 (池間昌祥)
- 五三 みはらし (安里武市)
- 五五 新月 (吉村忠勝)
- 六九 富の家 (仲宗根金二)
- 七一 一心亭 (佐藤富夫)
- 七二 萬福 (長浜恵康)
- 一〇二 イロハ亭 (砂川玄徳)
- 一一一 うるま食堂 (幸地□勇)
- 一二八 実咲 (豊見山良知)
- 一三六 つるかめ (西里一郎)
- 一三七 菊水 (伊波蒲吉)

——以下欠落——

一九六六年八月、鍛冶業の傍ら、「歌詞附 宮古民謡工四第一集」を刊行して、その後那覇へ転居し、宮古民謡の普及に尽力した古堅宗雄氏は、宗順氏の長兄、書家の宗和氏（清風）はその嫡孫。さらに付言すれば明治末期、宮古に初めてカツオ漁を導入した鹿児島出身の鮫島幸兵衛は、トミさんの義理の祖父と伝えられている。

旧平良市職員から宮古観光協会初代事務局長として、「博愛記念碑」の拓本や「宮古観光八景絵はがき」等を作成・普及して観光協会の基礎づくりに専念し、その後市議一期をへて那覇へ転居し、那覇バスターミナルKK総務部長・専務の傍ら、平良市史編さん委員として宮古関係史資料の収集に尽力した平良栄賢氏は邦子さんの実弟。

豊見山安雄氏の父安信氏は、旧平良市幹部職員を定年退職後は一時期、のちに市議会議長に選任される九期連続当選の比嘉米三市議の後援会長として市政に参与している。文子さんの両親は大正期宮古に移住した、那覇出身の、いわゆる寄留商人、宮古で生涯を終えている。

池間武之氏の両親、昌祥・ハル夫妻は「料亭春の家」経営主。父昌祥は戦前平良町議一期、戦後平良市議一期つとめている。長兄俊夫氏は沖縄電力宮古営業所長。傍ら原料の導入など、珈琲園の経営を支援している。

最盛期には四十余軒もあったという料亭も一九七二年の本土復帰前後には大方閉店してしまい、なかには改装してキヤバレーに転向した事例もある。今やあれほど盛業をきわめ、イリ里をイリ里たらしめるほど盛業をきわめた「サカナヤ」料亭を知る人も少なくなってきた。代わってバーや喫茶店、居酒屋等が多様な形で市街地全域に広がっている。

5. 「ヒト」の往来

人の往来は単なる往来だけではない。「モノ」はもとより様々な情報をもたらしてくれる。人びとはそれらの刺戟から多くを学び、己れと地域社会の発展に活用してきたことであろう。近代宮古には海・陸ともに交通網は十分ではなかったにもかかわらず、有名無名様々な人が出入りし、交流している。

一八八四（明治十七）年、製糖指導のため派遣された県職員城間正安は、人頭税に苦しむ人びとに寄りそって職を辞し人頭税廃止運動に参加する。九二年、真珠養殖を企図してきた新潟県出身の中村十作もくわわる。二人のよき指導者を得て廃止運動は大きく発展し、二人を含む四人の宮古農民代表による国会請願等をへて、一九〇二年人頭税は廃止される。併せて沖縄県全体の近代化も促進された。中村の真珠養殖は久貝の大浜で太平洋戦争直前までつづけられたようである。

熊本県出身の下川貞文は城間と同年から、平良小を振り出しに大浦小、新里小につとめ、長じて近代宮古を担う立津春方、富盛寛卓、仲松恵知ら多くの人材を育成している。さらに教職についた立津、富盛らによつて盛島明長、石原雅太郎、仲宗根玄愷、佐久田昌章・昌教兄弟、慶世村恒任、稲村賢敷、下地玄信らが育成されている。

一八九三年、青森県出身の笹森儀助は人頭税廃止運動で大きくゆれる状況をつぶさに見聞し、「南島探験」に反映させている。同書は沖縄県に関心を寄せる多くの人びとに読まれ、柳田國男らに影響を与えている。

一八九七年、新潟県出身で沖縄中学の教師、田島利三郎は蔵元や旧家の古文書等を筆写して、のち教え子の伊波普猷にすべてを託している。生涯にわたつて沖縄研究を深めた伊波は、「おもろと沖縄学の父」として知られている。

一九〇六年、鹿児島県出身の鮫島幸兵衛は宮古に初めてカツオ漁を導入し、戦前「宮古三大特産品」の一つに教えられたカツオ節の基礎を築いている。三年後、池間の人たちは組合を結成し自主操業を始めている。

一九二一（大正十）年、のちに「日本民俗学の祖」と讃えられる兵庫県出身の柳田國男は多くの宮古の古記録を筆写させ、「海南小記」等で紹介するとともに、晩年の大著「海上の道」では、原始日本人の祖先が初めて日本列島に入った土地は宮古島であろうと、壮大なロマンにみちた仮説を展開している。

一九二二年、柳田國男らの影響を受けたロシア人の日本研究家ニコライ・ネフスキーは稲村賢敷の案内で宮古各地をめぐり、学界に多くの宮古関係論文を発表している。二六年、二八（昭和三）年にも再度訪れている。その間、富盛寛卓、国仲寛徒、慶世村恒任らとも交流している。

一九三二年三月、鹿児島県出身の篠原鳳作は三四年十月まで、創立間もない県立宮古中学（五年制）で、全宮古から選ばれた一学年一学級（五〇人）の一〇七期生に大きな影響を与えている。季節感の乏しい宮古で無季句への自信を深め、俳壇で「無季句の騎手」と讃えられている。教え子らによつて、一九七二年十一月、カママ嶺公園に句碑「しんしんと肺碧きまで海の旅」建立。

一九三六、三八、四〇年と三度び来訪した山口県出身の河村只雄は、大神、水納の離島に至るまでこまかくめぐり、

「南方文化の探求」「続南方文化の探求」で広く紹介している。下地馨、山内朝保、島尻勝太郎らが案内している。

戦前期には以上のほか、県外からは稲垣国三郎、鎌倉芳太郎、佐藤惣之助ら。佐藤は一九二二年、八重山への途次一時下船し「漲水港望海樓(亭)」で食事したことを「琉球諸島風物詩集」(大正十一・一九二二年)に止どめている。県内では、伊波普猷、比嘉春潮、比嘉重篤、東恩納寛惇、与那国(山城)善三、当山正堅らが来ている。

おわりに

古琉球以来、戦後初期まで「ヒト」も「モノ」もすべて唯一港からの往来である。とりわけ近代以降、公務員、教員、商人、研究者、文人墨客……ら、様々な外来者のもたらした足跡は大きなものがある。宮古は自らの内発的成長にくわえて、これら外からの刺戟を受けて、市街地を形成した「ピサラ(平良)」を中心にして発展してきている。幹線道路もすべて放射状に港から始まっている。その核とも称すべき「ピサラ」が近年かげが薄れてきているのではなからうか。

一九七二(昭和四七)年の本土復帰を間近に控えたころから、料亭はバーやキャバレー等に押されて次々と姿を消し、テレビ等の普及で親子ラジオや映画館が消え、社会を反映してか大型スーパの郊外進出で三通りがかげりをみせる、

小ぎれいな和食、洋食、ファミリーレストラン等の登場で、従来型の食堂やソバ屋が閉店し、県下有数のマンモス校といわれた平一小、平良中、北小も過疎のかげりをみせはじめ、航空路の発達、大規模整備されたはずの平良港も大型架橋で、旅客の往来が途絶えてしまう。その間にも次々と郊外へ移転する諸官庁……。

二十一世紀を控えて、手狭になった市庁舎を新築するなら郊外へという構想が出たとき、当初から港近く官庁街の中心にあつて、戦後数十年余三度び現在地で新築し、「平良」発展の中核であつた市役所を郊外へ移転するのは歴史を失うことになる、引きつづき現在地で新築した五階建て高層庁舎も、五市町村合併のもと、諸官庁同様、近々空港近くへ移るのだという。古琉球以来、港から始まって「平良」ひいては宮古圏域発展の中核を担ってきた諸機関、諸施設のすべてが郊外へ転在してしまえば、今後の「平良」、宮古はどのような姿―景観を見せるのであろうか。

かつて城辺や下地はおろか、腰原、富名腰、屋原、下崎・成川など近郊の人びとが、交通機関が十分でないころから、月に一回(?)「平良」へ出て、映画を見て、ソバを食べて帰るのが何よりもたのしみ、喜びであつた、と言われていた「平良」は、今や大きな歴史の節目に立たされているようだ。

〈付記1〉

池間昌増氏の人と業績

はねじさかえ

池間昌増氏が亡くなられた。

昭和五十九年十月十九日午前七時三十七分、九十歳の高齢であった。イリ里の男の年寄りでは三番目の最高年であった。

池間氏は明治二十七年生れの生粋のイリ里人である。教育不毛の地といわれた商業の街イリ里に教育文化を吹き込んだ人の後輩の大きなはげみとなった。それは単なる向学心というよりはむしろ熾烈なる情熱のしからしむるところであった。

イリ里では奥浜先生（元助役奥浜恵宏氏の父君）に次ぐ二番目に学校教育者として教育畑へ進出された。小学校を幾つか転勤された後、来間小学校長を最後に教育界から引退された。

その後、迎えられて市役所入りされ、収入役、助役、選管委員長、監査委員長と七十歳まで永年地方自治行政に貢献された。

地方自治に対する永年の経験とうんちくは戦後中心的存在でひろく知られ、地方自治法の生字引といわれ、その指導を仰ぐ人々はあとをたたなかつた。

昭和四十七年四月二十九日には地方自治に貢献した功績により内閣より勲五等瑞宝章の地方自治功労賞叙勲の荣誉に浴されている。

昭和十年五月二十七日海軍記念日には日露戦争戦捷記念日の式典に列席のため、宮古支庁長明知延佳氏と共に当時未だ生存していた久松五勇士を引率して上覇したさっそうたる姿は今も記念写真に若き日の面影をしのばせる。

戦後軍政下に役所つとめのかたわら稼業の料亭組合長に推された。軍命による衛生検査に対応するため、いち早く宮古料亭組合自警団事務所を設置。四十余軒の組合員のコミュニケーションの場とし心の融和と団結をはかった。

最初に風俗営業を取締まる警察に対する協力として、犯罪防止のため組合で防犯灯を設置、明るい街づくりをした。石ころ道の汚名を返上するため各戸負担で宮古で初めてのコンクリ道路整備を断行し明るく歩きやすい道路にした。組合員で自警団を組織し、毎夜午前一時まで拍子木で火の用心の警邏、防火意識の高揚につとめ、あわせて料亭街での暴力や軽犯をも未然にチェックし、交番所に通報、犯罪や暴力を一掃その治安維持に協力、安心して遊興飲食のできる街にした。また本島からの監査官や歴代署長、各課長、交番所の職員のお款送迎会を催し、或は西交番への備品寄贈をするなど人間性ゆたかな組合長であった。

衛生面で保健所への協力として軍命令による従業員の検閲制度を保健所長とタイアップして、料亭組合事務所でも実施することに成功。米軍衛生官の設備点検に際し設備不十分なものには組合員で模合を起し、優先的に貸与、相互扶助の便宜をはかり設備改善させた。

毎月定期清掃日を設け衛生観念を鼓吹以て衛生思想の向上をはかった。

所長、衛生課長の歓送迎会は勿論欠かさなかった。

労働基準監督署に対する協力は、従来の借金制を月給制に改め、人権尊重の立前従業員に個室を与え、宮古の料亭には昔の辻遊郭が生きているとあって海外からの人々に喜ばれた。売春防止法、人身売買等の難問題を明治頭の組合員に納得させ一人の違反者も出さない細やかな心意の人柄でした。

税務署への協力は、一人も納税未納者を出さない様、各亭の経営状態を等級に分け、常の間税課と懇談の場を持ち、公平無私な遊興飲食税の完納を督促、署長、各課長、間税課職員への歓送迎会は忘れなかった。

組合長は時代の流れにサマサし、若者の心理をよく把握し、また起案、企画にすぐれ、その業績はかぞえあげればきりがない。

よわい九十は日本人の平均寿命からいえば天寿の言葉に該当しよう。人間尊重より技術尊重の死を引き延ばし、ただ生かされている長寿を看護する家族の苦労を考えてか功なり名

をとげ、美しく老いたあと、人間らしい優雅さと尊厳を保ち、死ねない長生きの延命治療にあいそをつかし、旅の終りの安らぎを求め長い眠りにつかれた。謹んで哀悼の意を表し、ご冥福をお祈りする。合掌。

〔宮古毎日新聞〕一九八四・十一・三

〈付記2〉

日曜訪問この人

平良市西里四六一一五 羽地栄さん（八十歳）

「新聞は知恵袋だ」と話し、新聞がないと一日が始まらないというこの人、読むのも好きだが書くのも大好き。人よんで「物知りじいさん」。「書くのは私にとっては」元気の素「だと話し満足そうに笑う。」

新聞に投稿を始めたのは昭和五十年頃から。「宮古毎日」が最初だったかなあ。ムサアザ（前会長・故山内朝保）が編集長をしている頃だから」と話し、古ぼけた新聞の切り抜きを両手いっぱい抱えてくる。テーマは歴史民俗関係が主。たまに教訓めいた投書もあり、生真面目な性格がうかがえる。

そのうち地元紙だけでは飽き足らず県紙の二紙にも「論壇」や「茶のみ話」「オピニオン」など様々なコーナーに投稿している。「たまに名前を変えて送っても、すぐにバレてしまう」と話すほど、文芸部ではその名が知られているようだ。

投稿を通して友人になった島外の人たちも多い。激励の手紙や電話をもらうのもしばしば。

イサト（西里、西部街）の主のような羽地さん。生まれも現在のときや商会付近だという。「当時は、家の北側は絶壁の海だった」と話し、平良港近辺の地形の変遷をうかがわせる。いまネオン街の西部もその頃ほとんどが料亭（サカナヤ）で、ちゃんと芸子さんがいた。

「大正五、六年頃ようやく街灯が点いたから、それまではランプの下で風俗営業が行われていたんだよ。考えられないでしょう。コップなんてないさ。盃で泡盛一杯一円の値段で、おつまみは何だったかなあ」。話は尽きない。

戦前は台湾に渡り、八年程市役所に勤務したこともある。戦後郷里に帰り、戦争で荒廃した土地を開墾し、もとの来軒（料亭）を造る。「あの頃、二十八軒の料亭があり、わしは料亭組合の幹事長を長年つとめた。戦後雨後の筍のように増えた飲み屋が料亭の真似をしようとしてよくいがみ合ったものだ」。記憶力のよさは八十の年を感じさせない。

いつか、イサトの民俗史を、文化の発祥地として出版したいと話す。サカナヤの変遷は女性史にもつながる。「しかしね、この仕事はわしの最後の仕事だと思っているから、なかなか手がつけられない」と含み笑い。

メガネなしで新聞、辞典もオーケーという羽地さん。十五年前、白内障を手術した後は、視力が若者に戻ってしまった。新聞週間の標語「書く自由伝える自由を支える読者」は、羽地さんにとって最後の読者を「新聞」に変える必要がありそうだった。

（「宮古毎日新聞」一九九三・一〇・二四）

〈付記3〉

西里は「文化の玄関」

仲宗根将二

「西里の主」ともいえた故羽地栄さんは、ことあるごとに「西里は文化の玄関」を口にし、西里生まれであることを誇りにしていた。人もあらゆる文物も漲水の港から入ってきたからである。港周辺の漲水・北西里・南西里の三自治会について、土地の人々は古くから「西里」と総称している。

古琉球には漲水泊（港）とよばれ、港に面して総合庁舎「蔵元」と宮古最高の聖地漲水御嶽が隣接している。周辺は、仲宗根豊見親や知里真良豊見親などの墓地群につづいて、かつては名勝ポウー崎もあった。東は石畳道をへて観音堂、祥雲寺、権現堂の古刹、貢布座、さらに藍屋井をへて在番仮屋三棟、医者仮屋、学校所と主要官衙が軒を連ねていた。

近代に入つて、在番仮屋一帯は国・県の出先機関等に変わり、諸産業の振興とあいまって、市場通り、西里通り、下里通り、市場、料亭街が生まれ、都市的景観が形成された。

明治末期から昭和初期にかけて、宮古上布、黒砂糖、カツ才節は宮古の三大特産品として広く県内外に知られるようになった。これらを積み出す漲水港は年を追うて、大阪―鹿児島―那覇―石垣―台湾・基隆を往来する船舶と、池間、伊良部、多良間等の離島航路でいっそう殷賑をきわめた。

「十五年戦争」のころは、出征兵士の歓送迎、あるいは無言の帰郷となる「英霊」の出迎えて休む間もない港であった。遠浅ゆえに汽船はすべて沖泊りのため、舢艫と伝馬船が夜遅くまで往復していたからである。

戦後の一九四七年三月、平良町が市に昇格したところから平良港と名を変え、一九七二年五月、沖縄県の本土復帰で国の重要港湾に指定され、大きく変貌した。

今や人の往来は戦中の海軍飛行場の変じた宮古空港に譲つたが、衣・食・住に関わる文物の大半は今も平良港からであり、宮古の玄関としての任はつづいていいる。

羽地さんを「西里の主」たらしめた故下里加味主と共に、この港界限―西里の変貌ぶりをどのように眺めているのであろうか。

〈付記4〉

羽地栄さんを悼む

仲宗根将二

羽地栄さんが五月二日未明、亡くなられた。今年米寿の八十八歳である。

羽地さんは一九七五年四月、宮古郷土史研究会設立以来の会員であり、翌年初めて役員を選任したが、当初の二か年間は故宮国定徳会長のもと、故座喜味盛紀さんとともに監事をつとめられた。その後はほぼ十年間、会長が現顧問の平良新亮さんに代わられたのちも運営委員をつとめられた。いわば我が研究会設立の生みの親の一人ともいえる。ユーモラスな一面もあつて、長年金融界におられた座喜味さんが護佐丸を元祖とする首里毛姓の家柄であることに敬意を表していたのである。ことあるごとに「座喜味親方」(ざきみウエーカタ)とよんでおられた。羽地さんは生まれも育ちも平良市は西部のイリ里である。沖縄本島の方言は聞くばかりでなく、話すほうも宮古ばなれておられた。時には宮古方言のつもりで首里方言を使っているのではないか、と錯覚をおこさせるほどに馴染んでおられた。

お二人とも酒は強いほうではなかったように思うけれども、若い会員が宮古の酒座にふさわしく議論沸騰しないうちに、

早くも酔眼朦朧としていたが、それでいて、酒をよくたしなまれる宮国先生にあおられてか、いそいそと二次会の話題をしておられたものである。興至らば料亭華やかなりしころのイリ里の殷賑振りもほどほどに聞かされたように思う。

定例研究会の発表ばかりか、不自由な足をかばいつつも史跡めぐりに同行して解説しておられた羽地さんが、ある時期から欠席がちになったのは体調がすぐれなかったばかりではあるまい。県立図書館の郷土史講座から、郷土史研究会設立まで、よき友であり、ウマのよく合った宮国定徳会長はじめ、座喜味盛紀さんらが早々と彼岸へ旅立たれたさびしさもあったのではないだろうか。年輩の方も若年も世代を超えてわだかまりのないよき研究会活動でありたい、と改めて痛感している。周知のように羽地さんの口ぐせは「宮古の文化の発祥地はイリ里」だということであった。四面海に囲まれた宮古には人も物もすべて海の外から入ってくる。古琉球以来、港（漲水港↓平良港）に面したイリ里は、その受入れ口だ、という持論にもとづくものである。それゆえであろう。イリ里には物知り、博識の古老が多い。話し好きの羽地さんは聞くのも好きである。暇さえあれば近所の古老をたずね歩き、昔の人の暮らし、方言、歌謡などを丹念にノートにとっておられた。家業の食堂「来来軒」に食事に通った多くの学生、研究者は、羽地さんの紹介で古老をたずね、あるいは羽地さんの話を聞くことで研究を深めることができた。そのうち羽地

さんに語ってくれた高齢者はこの世を去り、いつか羽地さん自身が「語り部」になっておられた。羽地さんこそまぎれもなく「イリ里の生き字引き」であり、「イリ里の顔」になっておられたのである。

今年米寿を迎えるお父上のために、長女の米子さんと夫君の満明さんご夫妻は、羽地さんの足跡をいくらかでも形あるものにしたたい、と取りあえずイリ里にかかわる論考一本にしぼってまとめた、「イリ里の民俗」（仮題）の出版準備をすすめていた矢先の訃報である。何と不運なことよ、とご夫妻の思いの届かなかったことを我がことのように口惜しがっていたところ、もれ伝え聞くところによれば、容体の急変をおそれたご夫妻は四月二十五日段階で印刷所の協力を得て、ガラ刷りの論考を製本してお見せしていたという。「元気になったら、皆さんにお配りして歩きたい」と喜んでおられたとか。天佑というのであろうか。今さらのように父子の情の深さに思いを新たにしている。

いまひとつ。平良市文化協会（立津精一会長）のご推挙で昨年十二月、沖縄県文化協会賞を受賞されたことも、遅きに失したとはいえ最後のよき餞になったのかもしれない。共和ホテルでの受賞祝賀会には米子さんご夫妻にともなわれ、車椅子で出席されたが、多くの参加者の祝福に静かに微笑み返していた姿が、いまでも鮮やかによみ返ってくる。

三日のご自宅での告別式には、郷土史研究会からも平良新亮、佐渡山正吉、岡本恵昭、砂川幸夫、下地和宏、下地利幸氏ら多くの会員が参列、羽地さんに別れを告げた。羽地さん、宮国先生や座喜味さんのもとで安らかにおやすみください。合掌。

〔「宮古郷土史研究会報」一一八号 二〇〇〇・五・一三〕